2000年ガーナ総選挙

長期政権の平和的交代

高　根　　務

はじめに

2000年12月，ガーナでは大統領選挙と国民議会選挙がおこなわれ，野党新愛国党（NPP）のJ・A・クフォーが新大統領に当選した。NPPは定数200の国民議会選挙でも100の議席を獲得し，翌2001年1月7日にはNPPを与党とする新しい政権が発足した。過去19年間にわたって国家元首を務めた国民民主会議（NDC）のローリングス大統領は，大統領の任期を2期8年までと定めた憲法の規定により出馬しなかった。かわりにNDCから出馬したローリングス政権時の副大統領J・A・ミルズは落選し，またNDCは国民議会選挙でも92の議席を得るにとどまり野党に転落した。

本稿では，今回の総選挙をガーナの政治史の中に位置づけると同時に，選挙結果に現れた各党の支持基盤の地域的偏りを明らかにする。以下ではまず，今回の総選挙までの道のりとその意義を確認するために，独立後から現在までのガーナの政治史を概観する。次に今回の総選挙の結果を分析し，国内各地域の投票パターンにどのような特徴があるかを明らかにする。

1　ガーナ政治略史

1957年の独立から現在までのガーナの政治史は，大きく二つの時期に分けて考えることができる。第1は1957～81年までで，この時期は度重なるクーデターと頻繁な政権交代，およびそれに伴う経済混乱に特徴づけられた，いわば政治経済的混乱期である。第2の時期はローリングス政権が誕生した1981年から2000年までで，この時期は長期政権下での政治的安定が実現し，また構造調整に代表される一貫した経済政策が採用された時期である。以下順に，この二つの対照的な時期をあとづけてみたい。

1957年の独立から81年末にローリングス政権が発足するまでの25年間に，ガーナは4回のクーデターを含む8回の政権交代を経験した。またこの時期には政権交代があるたびに経済政策も転換して長期的な視野にたった経済運営がおこなわれず，ガーナの経済は衰退の一途をたどっていった。まず初代国家元首ンクルマは，経済面では国家主導

型の開発政策を実行して多くの国営農場や国営企業を設立する一方で，政治面では中央集権体制の確立を進めていった。ンクルマによる中央集権体制の確立は，会議人民党（CPP）の勢力拡大と反対勢力の排除，およびンクルマ個人への権力集中を軸に進められていった。CPPの対立政党である統一党（UP）の中心人物であったK・ブシアは弾圧を逃れてイギリスに亡命し，また60年の総選挙でンクルマの対立候補であったUPのJ・B・ダンカは，ンクルマによって拘束され獄死した。その後のガーナ政治史は，このンクルマの流れを汲む政治勢力と，その反対勢力でダンカ＝ブシア系と後に呼ばれる政治勢力の，2大勢力の争いを軸に展開していった。

1966年2月，ンクルマは軍のクーデターによって政権を追われ，かわってアンクラ将軍を国家元首にすえた国家解放評議会（NLC）政権が樹立された。国外亡命していたブシアは，帰国してNLCが設置した国家諮問委員会の委員長となった。一方アンクラはその後汚職の疑いで辞任し，かわってA・アフィリファが69年4月に国家元首となった。その後69年8月におこなわれた総選挙の結果，ダンカ＝ブシア系勢力の中心的存在であったブシアが大統領となった。経済政策の面でNLCとブシア政権は，ンクルマ時代の政策から大きく方向転換し，IMFの勧告を受け入れながら経済への国家介入を減少させる路線をとった。

ブシア大統領の第二共和制政権は，1972年1月にアチャンポンらが率いる軍事クーデターで倒された。アチャンポンは軍人中心で構成される国家救済評議会（NRC）を組織し，自らその議長に就任して国家元首となった。同時に政府の要職のほとんどに軍人を登用し，政府機関を軍の支配下においた。経済面でアチャンポン政権は，自由主義志向の強かったNLCとブシア政権時代から転換し，再び国家介入型の経済運営を強めていった。アチャンポン軍事政権は民政移行の意思をなかなか明確にしなかったが，77年になってやっと民政移管のための総選挙の日程を79年7月に設定した。その後78年7月，アチャンポンは軍内部の抗争によって辞任させられ，かわってアクフォが国家元首となった。

総選挙直前の1979年5月，空軍将校で当時31歳であったローリングスがクーデターを試みたが失敗に終わり，投獄された。しかし同年6月4日，新たなクーデターが発生してローリングスは解放され，彼は軍部革命評議会（AFRC）の議長となって国家元首となった。ローリングスは，過去の軍事政権下での汚職・腐敗の一掃を宣言し，アチャンポンとアクフォを含む軍部首脳を逮捕した。この時期のローリングスの目的は，「ハウスクリーニング」と呼ばれる過去の汚職・不正の一掃であり，ローリングス自らは政権の座に居座り続ける意図は持っていなかった。このため，クーデター直後であるにもかかわらず総選挙は予定通り実施された。その結果，旧ンクルマ系のリマンが大統領に当選し，79年9月にはAFRCからの政権移譲がおこなわれた。

しかし1981年12月31日，ローリングスは2回目のクーデターによりリマン大統領率いる第三共和制を短命に終わらせた。ローリングスは暫定国家防衛評議会（PNDC）を組織し，自らが議長に就任して国家元首となった。政治経済的な安定と政策の一貫性に特徴づけられる，ローリングス長期政権の始まりである。ローリングス政権は，発足当初にはクーデター未遂の頻発やリビア・東欧諸国への接近など不安定要素が多かったが，PNDC内部の反対勢力の排除などによって次第に強固な政治基盤を確立し，政治的な安定を実現していった。経済面でローリングス政権は，83年に

IMF・世界銀行の勧告を受け入れて構造調整政策を開始し，その後一貫して自由化志向の経済運営を進めた。この一貫した経済政策の実施と，それを資金面で支える援助供与国・機関からの手厚い支援が，ローリングス政権の安定を経済面から支えることとなった。

国内の政治経済状況の安定が明確になってきた1990年末，ローリングスは民政移管の具体的な日程を明らかにし，92年4月には新憲法が国民投票で承認された。これに伴い，同年末に予定された総選挙をめざして10年半ぶりに政党活動が解禁された。活動を開始した政党には，旧ンクルマ系の4政党，ダンカ＝ブシア系のNPPの他，あらたな政治勢力としてローリングス率いるNDCが加わり，総選挙はこの3勢力で争われることとなった。11月におこなわれた大統領選挙ではローリングスが58％あまりの得票を得て当選したが，野党は選挙に不正があったとして翌月におこなわれた国民議会選挙をボイコットした。そのためNDCは定数200の国民議会議席のうち189という圧倒的多数を獲得し，NDCによる事実上の一党支配体制が確立した。

4年後の1996年におこなわれた総選挙にも出馬したローリングスは，前回と同様の57％の得票率で2期目の大統領に就任した。国民議会選挙でもNDCは133議席の安定多数を確保し，最大野党NPPは61議席にとどまった。旧ンクルマ系の2政党はわずか6議席しか獲得できなかった。このように92年，96年の2回の選挙でローリングスとNDCが勝利した事実は，70年代までの政治経済混乱を終息させて国内に安定をもたらしたローリングス政権に対して，国民が一定の支持を与えたものと理解することができる。

一方1996年選挙の直後から，国民の関心は4年後の総選挙に向けられていた。憲法の規定では，2000年の大統領選挙にローリングスは出馬できない。誰がローリングスの後継を務めるのか。あるいはローリングスは自らの任期を延長するために憲法改正の動きに出るのか。この「ローリングス後」の問題に関する，ローリングス自身の対応は早かった。1998年3月，彼は任期3年を残して早くも2000年末での引退を表明し，権力の座にしがみつくために憲法改正等を強行する意思のないことを明らかにした。そして98年6月には，次期大統領候補として副大統領（当時）のミルズを支援することを表明するなど，次期選挙への準備を着々と進めた。

2　2000年総選挙の結果と特徴

2000年の大統領選挙および国民議会選挙は12月7日におこなわれ，その結果はいずれも野党NPPの勝利を示すものであった（表1）。まず大統領選には各政党から計7人が立候補したが，事実上は与党NDCのミルズ候補と，最大野党NPPのクフォー候補の一騎打ちとなった。結果はNPPのクフォーが有効投票総数の約48％を獲得，他方与党NDCのミルズは約45％にとどまり，票数にして23万票以上の差がついた。ただし有効投票数の50％を超える票を獲得した候補者がいなかったため，憲法の規定により上位2候補による決選投票が12月28日におこなわれた。1回目の投票後に多くの野党はNPPへの支持を呼びかけたため，決選投票でクフォーは反NDC票ともいうべき票を含めた約50万票をさらに上積みして56.9％の得票率を獲得し当選した。

他方，定数200の小選挙区制で争われた国民議会選挙の結果も，与野党逆転を示すものとなった。それまで61しかなかったNPPの議席数は一挙に100にまで拡大した一方で，それまで133の安定多

表1　過去三回の総選挙結果

州　名	大統領選挙（得票率%）						国民議会選挙（議席数）					
	1992		1966		2000（決選投票）		1992		1996		2000	
	NDC	NPP	NDC	NPP	NDC	NPP	NDC	NPP	NDC	NPP	NDC	NPP
ウエスタン	60.7	22.8	57.3	40.9	39.1	60.9	16	0	12	3	10	8
セントラル	66.5	26.0	55.7	42.9	39.7	60.3	16	0	14	3	9	8
グレーターアクラ	53.4	37.0	54.0	43.3	40.1	60.0	22	0	13	9	6	16
ヴォルタ	93.2	3.6	94.4	4.8	88.5	11.5	18	0	19	0	17	0
イースタン	56.7	38.5	53.8	45.0	37.6	62.4	22	0	15	11	8	18
アシャンティ	32.9	60.5	32.8	65.8	20.1	79.9	33	0	5	28	2	31
ブロンアハホ	61.9	29.5	61.7	36.0	41.7	58.3	20	0	17	4	7	14
ノーザン	63.0	16.3	62.1	32.0	51.1	48.9	23	0	18	3	18	3
アッパーウエスト	51.0	8.9	74.6	11.2	62.0	38.0	8	0	8	0	7	0
アッパーイースト	54.0	10.5	69.0	17.4	57.2	42.8	11	0	12	0	8	2
全　国	58.3	30.4	57.2	39.9	43.1	56.9	189	0	133	61	92	100

（注）(1)NDCとNPP以外の党は省略した。1992年国民議会選挙でNPPの議席がないのは、選挙をボイコットしたため。
(2)NDC：国民民主会議（National Democratic Congress）。
(3)NPP：新愛国党（New Patriotic Party）。
（出所）選挙管理委員会による集計をもとに筆者作成。

数の議席を有していたNDCは92まで数を減らして野党に転落した。ガーナの政局は，1992～96年のNDCによる事実上の一党支配，96～2000年のNDCによる安定多数支配を経て，2001年からは事実上の二大政党制に移行したのである。

しかしこの新たな二大政党制の中身は，1981年以前のような，ンクルマ系政党とダンカ＝ブシア系政党の二大勢力が中心であった構造とは異なっている。90年代以降のガーナの政党政治は，80年代のPNDC支配の流れから発生した新しい勢力であるNDCを中心に展開し，これに対抗する形で独立当初から存在するンクルマ系とダンカ＝ブシア系の二大勢力が野党となって推移してきた。そしてこれらのうちンクルマ系は次第に影響力を失い，その一方でダンカ＝ブシア系のNPPはNDCに反対する層の支持を集めて最大勢力として復活した。つまり現代の二大政党の構造は，比較的新しい政治勢力であるNDCと，独立当初から存在するダンカ＝ブシア系勢力のNPPによって構成されている。

ただし二大政党制とはいっても，両者の政策志向，特に経済政策面での基本的な方針に大きな相違があるわけではない。ンクルマ系とダンカ＝ブシア系の二大勢力時代には，前者が社会主義志向で後者は自由主義志向，という明確な政策志向の対立があった。しかし，1983年から構造調整を進めて民間主導型の経済運営を推進してきたNDCと，ダンカ＝ブシア系のNPPとの間に基本的な経済政策の方向性の違いはない。したがって現在の民間重視型経済政策の方向は，NPP新政権の下でも継続するものと予想される。これは別の面から見れば，NPP新政権が経済政策の面で過去のNDC政権との違いを国民にアピールすることは容易ではない，ということでもある。

2000年の総選挙では，1992年および96年の選挙と同様の，地域ごとの政党支持基盤の違いが現れた。しかし2000年選挙における各政党の支持基盤構造には前回とは異なる微妙な変化が見られ，これが野党の勝利に結びついたと考えられる。

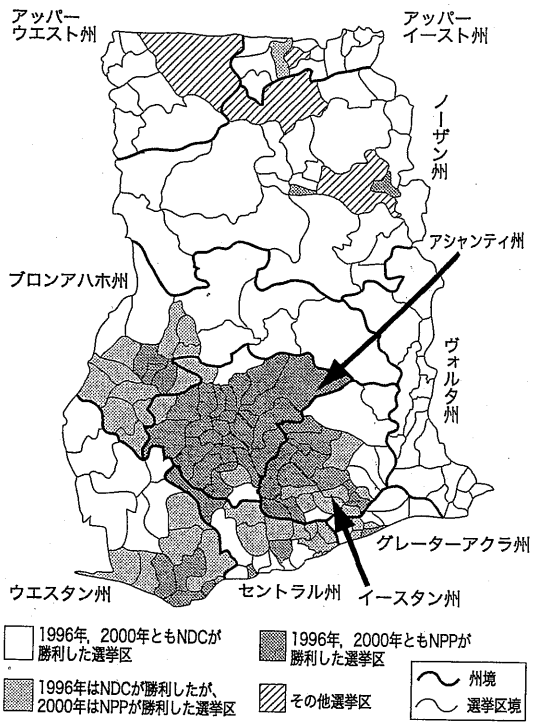
まずローリングスが勝利を収めた1992年と96年

の大統領選挙の投票結果を州ごとに見ると，2回ともほぼ同じような得票パターンが観察される。すなわち，ヴォルタ州ではローリングスが9割を越える圧倒的な支持を集める一方で，アシャンティ州では野党NPPに敗北する。しかしこの2州を除く各州では，安定過半数の票をローリングスが獲得し，全国レベルの総計では50%以上の得票で当選する，というパターンである（表1）。

他方2000年の大統領選挙では，ヴォルタ州とアシャンティ州の投票行動に大きな変化はないものの，他州では与党NDCと野党NPPの支持が割れている。決選投票でNDCのミルズ候補が勝利したのは，ノーザン州，アッパーウエスト州，アッパーイースト州の，ガーナ北部地域で，ガーナ南部の各州ではNPPのクフォーが勝利をおさめている。これを選挙区ごとの分布で見ると，政党支持構造のパターンはさらにはっきりする（図1）。すなわち，NPPは都市部および経済資源を有して開発の進んだ南部地域の「中心」部で支持を集めている一方で，NDCはヴォルタ州，ガーナ北部，ガーナ西部の遠隔地など，開発の遅れた「周辺」地域で支持を集めているのである。

このような政党支持構造が現れた背景の一つとして，ローリングス政権下での農村開発重視の政策の影響が考えられる。ポピュリスト的なイデオロギーの強いローリングスは，辺境地域のインフラ整備などの農村開発政策を積極的に進めてきた。これが，「周辺」地域の選挙民の支持を獲得した原因の一つである。他方，前回ローリングスが勝利したグレーターアクラ州の首都圏では，今回の大統領選ではNPPが6割の支持を集めて逆転した。この背景には，物価の高騰，付加価値税の導入など，都市部住民の生活を苦しめている経済状況が長く続いていることへの不満があると考えられる。

図1　1996年・2000年大統領選挙（1回目）における支持基盤の分布と変化



（出所）Nugent, P., "Living in the Past : Urban, Rural and Ethnic Themes in the 1992 and 1996 Elections in Ghana," *Journal of Modern African Studies*, 37(2), 1999, p.301，およびガーナ選挙管理委員会発表の選挙結果にもとづき，筆者作成。

ただし「中心」「周辺」地域のいずれでもNDCの支持率は前回より低下しており，NDCの支持基盤が弱まっていることは全国的な現象である。NDCのミルズ候補が多数票を獲得したガーナ北部やヴォルタ州でも，得票率で見るといずれも1996年の大統領選よりも低下している。すなわち今回NDCのミルズ候補が勝利した地域でも，過去2回の大統領選でローリングスが集めたほどの支持は得られていないのである。

ここでわれわれは，ガーナの選挙民は大統領選で「人物」に投票しているのか，「党」に投票しているのか，という非常に困難な問いにぶつかる。

これは言い換えれば，選挙民の判断基準が，「ローリングスなら支持するがミルズなら支持しない」という論理なのか，それとも「NDCの候補はもう支持しない」という論理なのか，という問題である。強力なカリスマ性を持つローリングスに比べ，ミルズ候補は「個人」としてのアピール力が弱く，これが得票数に影響したことは事実であろう。しかしミルズ候補の敗北を，そのような個人の属性で全て説明するのは，おそらく無理がある。ミルズ候補率いるNDCは，大統領選挙のみならず国民議会選挙でも多くの議席を失っており，NDCの支持率低下は大統領選挙，国民議会選挙に共通したもので，かつこの傾向が全国的に見られるからである。したがって今回の選挙結果は，長期にわたったNDC支配に対して交代を求める国民の声を反映したものであると考えられる。

最後に，大統領候補個人のエスニックな属性と得票パターンとの関係についてふれておきたい。過去2回の大統領選挙で，アカン系の候補者を擁立したNPPが特にアシャンティ州で支持を集めた一方で，エヴェ人の母を持つローリングスがヴォルタ州（主にエヴェ人が居住）で圧倒的な支持を集めた事実は，「選挙民は自分と同じ部族の候補者に投票する」という議論に一定の説得力を与えていた。しかしこのような議論がガーナでは妥当でないことが今回の選挙で明らかになった。今回NDCから出馬したミルズ候補は，セントラル州出身のファンテ人である。にもかかわらずミルズ候補は自分の出身州のセントラル州で，アシャンティ州出身のクフォー候補に敗北している。他方でNDC候補者に対するヴォルタ州住民の圧倒的な支持は，候補者がローリングスからミルズに変わっても変化していない。選挙民の投票行動は，エスニックな属性だけでは説明できないのである。

おわりに

今回のガーナの政権交代は，以下の2点で画期的なものであった。第1は，ガーナの政治史上はじめて，選挙による政権交代が実現したことである。1957年の独立以来，ガーナの政権交代はクーデターによるものと軍政内部での交代ばかりで，与党から野党への政権委譲が選挙によって実現したことはなかった。その意味で今回の選挙による政権交代は，ガーナの政局が新たな安定と成熟の局面に入っていることを内外に印象づけるものであった。第2は，19年にもおよぶローリングス長期政権の交代が，平和裡におこなわれたことである。アフリカにおける長期政権の交代は，コートディボワールのウフエ＝ボワニ大統領の例のように国家元首の死によってはじめて可能になるか，あるいはガンビアのジャワラ大統領や旧ザイール（現コンゴ民主共和国）のモブツ大統領の例のように，内戦やクーデターなどの武力によって政権を追われる場合がほとんどである。長期政権の終焉と野党への政権委譲が選挙によって平和裡に実現した事実は，ガーナが政治上の大きな試練を一つ克服したことを意味する。

（たかね・つとむ／地域研究第2部）